

シンポジウム4：生き方に向き合う在宅医療

演題名	「胃ろう」という課題を通して終末期医療を考える ～もう、迷わん～
-----	-------------------------------------

概要

瀬戸内の町に住む友蔵は、じいちゃん子の孫と温泉を楽しみに幸せに暮らしていた。そんな友蔵は、脳梗塞から認知症となり、身体機能が衰え嚥下機能も低下し、誤嚥性肺炎のため入退院をくり返す状態となった。これまでは加療によって回復してきたが、寝たきり状態となり意思疎通も難しくなってきた。それでも妻のももこは、友蔵には家で好きなように暮らしてほしいと願い、家での介護を頑張っていた。ある日、誤嚥性肺炎での入院をきっかけに、病院医師はももこの介護負担を理由に、今後は胃ろうにして施設で療養することを提案する。終末期において食べられなくなったとき、医療機関の医師はあたり前のように家族に胃ろうを勧める。自分で判断や意思表示できない本人に代わって、意思決定をしなければならない家族に必要なだったのは、しっかりと本人の生き方に向き合い、相談に乗ってくれる身近な医療者の存在だった。胃ろうをしない選択もあることを伝え、これからの療養生活を誰がどのように支えていけるかを具体的に話してくれる医療者の存在は家族にとって安心感を得ることができる。決断を迫られた家族が、悩み葛藤しながら得た結論は、胃ろうをせず自然に看取るという選択と覚悟だった。同じような状況で胃ろうを選択した家族に出会い、今の心情を聞く場面があるが、体験者の話を聞くことも家族にとっては大変参考になる。

病院では絶食と言われ食べさせてもらえなかった友蔵は、家では、ももこが工夫して作った料理をパクパク食べ、のちに晩酌も楽しめるまでになっていた。

全体を通して、家族の決定を可能にし、「これでよかった」と認め合い、本人が残された日々を、いかに輝いて生きていくかを支える医療があることを伝えたい。

死や老化にしっかり向き合い、「人間はいつか必ず死ぬ」という前提に立って、亡くなるまでどうよりよく生きるかを家族と一緒に考え、支援できる医療者の存在が必要であることを強調したい。そのような医療者と出会うことで、「もう、まよわん！」と納得し、遺された家族が後悔のない選択ができるように支え合う地域社会を創る重要性を伝えたい。

そして、おらが町で、輝きを取り戻し、楽なように、やりたいように、後悔しないように、「幸せに生きる」ことを応援したい。